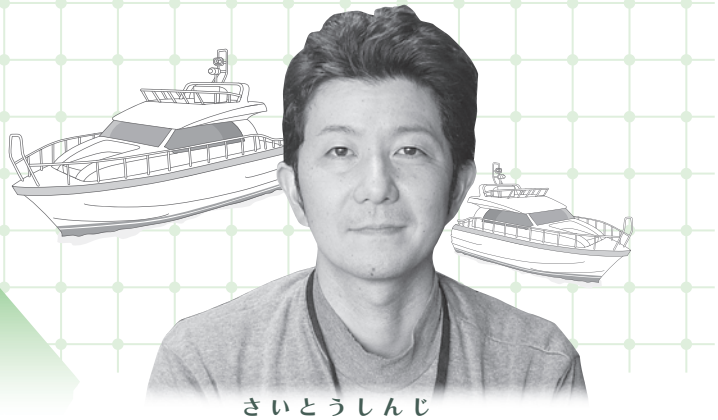
こうほうショッキング Vol.96

Kōhō shocking



さいとうしんじ 斉藤 慎治さん

●プロフィール

33歳　美津島町竹敷出身、在住。佐世保工業高等専門学校で電子制御工学を学ぶ。技術派遣された横浜で１年間過ごし、22歳で帰郷。父親が今から40年ほど前からはじめたSSボート製作所で共に働く。両親と祖父母の住む実家の隣に、妻と2人の子どもとの4人暮らし。

○学生時代はいかがでしたか？

学業もですが、それ以外でも充実していました（笑）。部活では硬式テニス部に所属していましたが、5年制の高専ですので、最上級生の先輩はもう20歳。上下関係は厳しかったですが、高校生以上の人がいることで、他の社会人チームや社会人との関わりも大きくなり、楽しかったです。

○電子制御工学を学ぼうと思ったのには、家業を継ぐという意識があったからですか？

僕が家業を継ぐ、という意識はあまりありませんでした。もし継ぐにしても、実際の現場では使っていないCAD（コンピューターを用いて設計をすること）をゆくゆくは取り入れてもいいかなという思いもありましたし、どんな仕事をするにしてもシステムやCADができると役に立つかなと思って。電子制御工学は、システムのプログラムであったり、手作りのロボットを使って行われる競技「ロボコン」のようにモノを動かすことであったりと幅広い分野。2年生からCADや製図など専門分野の科目が加わってきて、5年生になると卒論に取り掛かります。前年の学生の成果を上回るように研究を積み上げていくもので、僕たちの卒論は、手書き図面を自動で認識するプログラムを作るというものでした。

○仕事をするお父さまをずっと見てこられましたが。

父は、僕が小さい頃から仕事中心、仕事優先。いつも仕事しているイメージです。船の分野でいえば、父はすごい。天才と変人を兼ね備えている人。高校中退で車の整備工として働き、20歳そこそこで実家に帰り、さて何しよう、って考えた。ロケットを作るのは無理、車を作るにも免許がいる、じゃ船を作ろう、って始めたこの仕事。伝馬船から始まって、釣りブームで瀬渡し船の受注が増え、作る船も会社もだんだん大きくなった。父と一緒に仕事するようになって12年目。父ができることは最低限できるようにならなくてはというプレッシャーがあります。作っては走らせ、データを蓄積し、改良して。コツコツと数をこなしているところです。

○プレッシャーと同時にやりがいも感じていらっしゃるのでは？

確かに、僕は営業職よりもモノ作りのほうが向いていると思います。プレジャーボートから漁船まで、長さも、内部の分け方も全て異なり、一艘一艘がオーダーメイド。紙の上に引いた１本の線が、立体となり、船となって海を走っていくのにはやりがいもあります。

○喜びを感じる時は？

家を建てるというのは、夢をかなえる一大事と言われますが、船はそれ以上。プレジャーボートへの要望は、年々大きくなっています。洗濯機や大型テレビ、ワインセラーに製氷機…限られた室内の広さの中にどのように配置するか、いかに要望に応えられるかと頭を悩ませます。加えて速力を求められるので、実際に動かしてみて思いにかなった走りをしてくれた時には、喜びというよりはホッとしますね。僕たちの仕事は、納品した船が広告塔。「○○さんの、あの船みたいに」といってオーダーしていただける、走りとスピード、乗り心地の良い船を、これからも作っていきたいです。

毎回、登場してくださった方に次の方をご紹介いただくこのコーナー。次回は美津島町雞知にお住まいの木村真吾さんです。お楽しみに。